

優秀賞



私にとつての「俺がやんなきゃ」

岩手県釜石市立釜石中学校

三年 田 中 覧 宇

私の生まれ育った大槌町では、毎年三月十一日に
なると、町で東日本大震災の追悼式が行われる。

ある日、父がパソコンと向き合う姿があった。私の
祖母、つまり父の最愛の母は震災で行方不明に
なっており、父は追悼式での「遺族代表のことば」
を述べることになっていた。普段は明るく私たち家
族を笑わせてくれる父ではあるが、父は今まで祖母
への思いを打ち明けてこなかったから、父の思いを
聞いてみたいという期待というか楽しみ、そんな気
持ちは私にはあった。父が遺族代表に決まり、新聞
社の人が家に訪ねてくることもあり、当時の状況や
父の亡き母への思いをインタビューしに来た。私も
実際にインタビューを受けた。私の前で取材に答え
る父の言葉、そして「遺族代表のことば」に共通し
ていた父の言葉がある。

「俺がやんなきゃ」

それは震災から今までの父の覚悟と強い信念を表現
した言葉だった。

八年前のあの日、父は兄が体調を崩したため母と
三人で盛岡市の病院にいた。地震が起きたのは、検
査結果を待っていた時だった。帰りの車内で宮古市
の思いもよらぬ現状を目にした父は、とにかく急い

で帰らないといけないと思い、大槌町まで戻ってき
た。辺りは真つ暗で波が近くにきていて、周囲でプ
ロパンガスが爆発しまるで火の海だった。父は母と
兄を車に残し、暗闇の中、海に飲まれた街を一人で
歩いて、私がいた避難所まで探しに来てくれた。小
さかった私は、その時は「とにかく会えて嬉しかっ
た」ただそれだけだったが、今、改めて震災の時の
父の話を聞き、自分の命を捨てても探したいとい
う私への深い愛情が感じられる行動だったと思つた。
電気工事業をしている父は震災から一週間が経つ
たある時、知り合いから工事の依頼を受けたそうだ。

しかし、工事に必要な道具は流されて、何より自分
の母が行方不明。依頼を受け入れる余裕も気力もな
かった。その工事は友達に代わりにやってもらつた
そうだが、父は困っている人がいることを知って、
自分にできることをして助けなければならぬと思
うようになった。父はユアテックという会社の特大
のケーブルを調達してもらえようとお願ひしに
行つた。ケーブルはとても危険なもので簡単に了解
してもらえない物ではなかった。しかし、父は

「俺を信用してくれ。」

と強くお願ひし、受け入れてもらうことができ、無
事に調達してもらうことができた。ケーブルを使つ
て吉里吉里の四カ所の避難所に電気をつけることが
できた。その他にも、大槌町の役場や宮古市まで行つ
て復興工事に努めた。その間は、祖母を探すことは
できなかった。今考えると、本当は工事の依頼に応
える余裕もなかったはずなのに、依頼を引き受け続
けたのは、復興工事が自分にとつての使命だと考え
ていたからかもしれない。

父の「俺がやんなきゃ」という言葉は、私の「俺
がやんなきゃ」と言えるもの、使命とは何かを考え
るきっかけになった。

私の使命、それは、いつか故郷を盛り上げ、活性
化できる存在になることだと考えている。そのため
に、学校行事では自分の力でみんなを盛り上げよう
と思ひ、学級会長や体育祭の団長など、進んで取り
組んだ。

その中で、今、自分に必要な力は、「自律する力」
である。一番辛かったはずなのに、弱音を吐かず、
今まで表に出すこともなかった父に対し、私は、様々
なりリーダーになる中で、つい感情に流されることが
ある。昨年の文化祭の合唱練習。クラスのみんなに
何度声をかけても、歌わなかったり、切り替えをし
なかつたりなど、自分の思った通りにいかない日が
続いて、我慢できなくなって教室を飛び出してし
まった時があった。そんな私のことをクラスの友達
は必死に探していた。その間は、クラスのみんなの
ことを考える気分ではなかった。でも、学級のリー
ダーとしてあるべき姿だったのは、逃げ出す方向に
行かないで仲間と助け合いながら一つの目標に導く
姿だったと思う。私の一番近くにいる父が使命感を
持つて復興工事に全身全霊を注ぐことができたの
は、祖母がいない生活を受け入れられない気持ち
を抑える力があつたからだと思う。私もこれからは、
父のように、揺るぎない、ブレない精神力と、心の
弱さに打ち勝つ芯の強さを持った、器の大きい人
になりたい。

今年も文化祭の合唱練習の時期がきた。今度こそ、
芯の強い、器の大きいリーダーとして、みんなを盛
り上げ、最高の文化祭にしてみせる。もう、自分の
心の弱さに負けない。私の再チャレンジは、未来の
私が、「故郷を盛り上げる存在」になるための糧と
なるはずだ。私にとつての「俺がやんなきゃ」を成
し遂げるための挑戦は、もう始まっている。